

授業中における若手教員の応答行動は教職経験によって どのように変容するか

瀬戸 健*・近藤 誠**

(平成26年9月30日受付；平成26年11月5日受理)

要 旨

40歳以上の教員が教員全体の70%を占めると言われる現在、教員の大量退職と大量採用という大きな世代交代が進行している。このことは、経験豊かで指導力のある教員が大量に教職を去り、代わって初任者を含む若年教員によって教員組織が担われるということであり、学校の教育力維持・発展の観点から、若手教員の授業力向上は、教育委員会や学校の大きな課題となっている。

そこで本研究は、若手教員がどのようにして授業力を高め熟達化するのかについて明らかにすることを目的とする。その際注目したのが、教師が授業で行う応答活動（以下、リヴォイシング revoicingという）である。

一柳（2009）は、児童の聴く活動に注目し、授業における教師のリヴォイシングが児童の聴く活動を支援する可能性について述べている。授業直後に直後再生課題の調査を行ったところ、児童は教師がリヴォイシングを行った内容について特に多く記憶し記述していたのである。であるとすれば、児童は教師のリヴォイシングを目印として学習しているのであり、その量や質が児童の学習、つまり、授業の質に大きく影響することが予想される。

そこで、リヴォイシングについて初任者数人の授業を分析するとともに、若手教員一人の2年間にわたる数回の授業について、リヴォイシングの変容を継続的に追うこととした。

その結果、初任者は単純な復唱によるリヴォイシングが多いのに対し、若手教員は授業経験を重ねるごとにリヴォイシングを意図的に使用できるようになること、何を教えるかという指導内容の理解が、リヴォイシングの使用に影響していることが示唆された。

KEY WORDS

若手教員 young teachers 応答行動 revoicings 教職経験 teaching experience

1 問題の所在

我が国の教員の年齢構成を調べると、現在では40歳を越える教員の割合が70%を越え、毎年多くの教員が定年で退職するという大量退職の時代を迎えている。これはもう一方で大学や大学院を卒業、修了した若手教員の大量採用時代が到来したことを意味する。教職経験をもつ教員に代わって若手教員が学校の教育活動の中核を担うとなれば、学校の教育サービスの質低下が起こるであろうことは、想像に難くない。もちろん、和歌山県教育委員会が和歌山大学と連携して実施している初任者研修、東京都教育委員会が行っている初任者研修制度の延長など、これに対応しようとする動きも見られている。

近代学校体制が成立以降、我が国において教員の力量を向上させるための営みがなかったことはなく、すでに明治10年（1877年）ころには、将来、附属小学校となる練習学校をもつ師範学校が全国に設置されている。教育方法の研究についても大正新教育運動を挙げるまでもなく、全国的に取り組まれてきた。

現在でも、教員の力量を向上させるための中心的な取組は、各学校で行われている校内研修であり、中でも授業研究は欠かせないものとして実施されている。加えてそれは、Lesson Studyとして紹介され諸外国にも広がりを見せている。授業研究で用いられる授業分析は、例えば重松鷹泰らによって我が国独自に始められたもの¹⁾から、ストップ・モーションや直接刺激法を用いたカンファレンスなど、多様な方法が開発されている。授業が最終的には、授業の実践的な担い手である教師によって、その実践の過程において統一的主体的に把握されなければならないことを考えるとき、授業分析は大きな力を発揮していると言える。また、認知心理学の分野でも初任教員と熟達教員について比較研究が盛んに行われ、その能力の差も明らかにされつつある²⁾。しかし、教員がどのような過程を通してその力量を高めているのかについては、明確な研究成果が見当たらない現状もある。

*学校教育学系 **川越市教育センター

そこで、小論では、一柳（2009）に注目し、教師の授業中における応答行動（revoicing）が教職経験を経ることによってどのように変容していくのかを明らかにして、教員の力量向上過程研究の基礎的取組としたい。

一柳のリヴォイシング研究は、教師の力量形成に関する研究ではない。児童の聴くという行為に関する研究である。その最も興味あるところは、児童が話し合い活動の最中、教師のリヴォイシングを目印に記憶しているという傾向性を授業後の再生課題による調査で明らかにしたことである。つまり、一柳は、適切なリヴォイシングが児童の聴くという活動を支援し、学習効果を高める可能性を指摘したのである。であれば、授業中のリヴォイシングを分析することは、教師の力量の一端を明らかにすることにつながるのではないかと考えた。

調査は、次の手順で進めた。

2 調査

初任教員の授業を教室の前及び後方から2台のビデオカメラで記録し、それをもとに授業記録を作成した。初任教員の授業記録は、平成26年1月から2月の間に、T県T市の小学校長会の協力を得て8名について1時間ずつ行った。また、それとは別に教職経験6年目の教員について、継続的に記録をとってきているので、それを変容過程の分析対象とした。

一柳が言うように、リヴォイシングが児童の聴く活動を支援すると考えられるのは話し合い活動であり、また紙幅の関係から記録した8つの授業の中から、意見の交流や話し合い活動が期待できる国語科の説明文と物語文の学習、社会科の授業を選んだ。国語科の言葉の学習、図工科の製作活動、算数科などの映像もあったが、今回は除外した。

特にリヴォイシングの形態については、枠組みをつくらず、授業記録で見いだされるリヴォイシングについて、著者2人が別々に分析を行い、一致した発話の機能を記述することとした。リヴォイシングであるかどうかについても同様の手続きをとった。一致しないものは排除した。結果を次項からから記述する。

3 初任者の授業に見るリヴォイシング

3. 1 第4学年国語科「ウナギのなぞを追って」から

授業は、説明文「ウナギのなぞを追って」を読み、形式段落ごとに見出しをつける学習活動が行われた。前半は、児童一人一人が自分なりに作品を読みワークシートに見出しを書き込んでいる。授業の後半は、その見出しを交流する場面である。授業開始から27分50秒から交流が始められ、その冒頭でのリヴォイシングの状況は、表1のようになった。

表1 形式段落ごとの見出しについて

分.秒	教師の発話	児童の発話
27.50	T51：はい、1段落からいきます。じゃ、1段落、どんな見出しをつけましたか？あ、結構いる。はい、はるおくん。	C：目的？
	T52：はい？	C：①場所と目的。
	T53：場所と目的。場所と目的。 (話しながら板書する)	C：②先生、それ書くの？
	T54：書かなくていいよまだ。はい、けいたくん。	C：③毎年行く目的？
	T55：毎年行く目的、毎年行く目的。(話しながら板書する)はい、ほかにもあった？何か、目的が2回出ているね。はい、しんじくん。	C：④マリアナの海はどこにあるか。
	T56：マリアナの海はどこにあるか。場所にちょっと関連してくるよね。はい、しんじくん。	C：これから何をするか。

児童の①の発言を受けて、教師はT53のように児童の発言を2回繰り返しながら板書している。おそらく無意識に2回繰り返す発言内容を確認したのであろう。しかし、児童は、教師が2回も繰り返す板書までしたのでそれが重要な内容であるととらえ、②でその見出しをノートに書くのかと尋ねている。同様に③では、「毎年行く目的」という発言を受け教師は2回復唱しながら板書している。これらのリヴォイシングの機能は、「確認」であり、2回繰り返すのは正確に板書しようとするときの当該教師の癖なのであろうか。

これに対し、T56では、前半は④の「マリアナの海はどこにある

	T29： <u>似てるの？広野さんと似てるよっていう人？付け足してくれる人？</u> じゃあ自分の言葉で言ってみよう。田村さん。はい、どうぞ。	C：(挙手あり)
34.12	T60： <u>すごく悲しかった。</u> はい、りおさん。 T61： <u>なるほどね。悲しいお話だと思った。悲しいお話だと思ったのは5段落だけ？全部を見て？なるほどね。それからちいちゃんは<u>おとうちゃん、おかあちゃん</u>だっけ、<u>りおさんは会いたい？</u>こわいよ。そうかそうか。</u>	C：④ <u>すごく悲しかった。</u> ちいちゃんを見つけたのに、 <u>ちいちゃんの命が空に消えた</u> っていうことは、 <u>ちいちゃんが死んだ</u> のがすごく悲しかった。 C：⑤心に残ったのは5段落です。ちいちゃんの命が消えたことが <u>一番悲しかった</u> です。 <u>うれしくて悲しい</u> お話でした。ちいちゃんはこのとき、お母さんお父さんと一緒だったと思います。

感想をリヴォイシングするのではなく、児童が発言している叙述の「知らないおじさんと一緒に逃げた」という事実を取り上げるべきではなかったか。さらに、T29では、児童の挙手に対して「似ているの広野さんと」という言葉が返されている。「似ている」は、発言内容の他者との関係性を表しているが、固有性は出にくい。本来なら、「広野さんと同じ場面を取り上げた人は」と叙述を取り上げ児童一人一人の固有で多様な意味づけを引き出すべきではなかっただろうか。

同様の傾向が授業の後半部でも見られている。④では、児童は「ちいちゃんの命が空に消えた」という叙述を取り上げて、それは死んだということであると意味づけ、そして「すごく悲

しかった」と述べているのに、教師は「すごく悲しかった」というところしか復唱していない。また⑤でも、「うれしくて悲しいお話」とその子しか表現できないような言葉が発せられているのに、「悲しいお話だと思った」と復唱され、「5段落だけ？」と話題を広げる補助発問が続く。そして、児童が「ちいちゃんはこのとき、お母さんお父さんと一緒だったと思います」と「うれしくて悲しい」の根拠を述べているのに「おとうちゃん、おかあちゃんだっけ、りおさんは会いたい？」と全くずれたりヴォイシングになってしまっている。

このようなずれは、教師が児童の感想に拘泥しすぎており、一人一人の固有性は、同一の叙述の読みの違いとして表現されることを理解していないことに起因すると考えられる。

3. 3 第2学年国語科「スーホの白い馬」から

これも単元の導入から2時間目の授業である。1時間目は、作品の音読と外部講師を招聘しての馬頭琴の演奏が行われている。本時の導入では、前時の思い起こしを行い、衣食住にふれながらモンゴルのイメージを膨らませている。その後、音読を行い、さらに心に残った叙述に傍線を引いてそれを発表する活動が続く。どの叙述を選んだかの

発表を教師のリヴォイシングによって支援することで、交流の契機が拓かれるのではないかと思われたが、授業の実際は、表3のようなものであった。

T61では、その直前の児童の発言を復唱し、教科書の叙述を確認するにとどまっている。そして、「なるほど」と言い、教師が受け取ったことだけを示している。T62でも同様に直前の児童の発言を復唱し、教科書の叙述の場所を確認している。そして、「他に」と言い、発表する児童を増やそうとしている。

表3 「スーホの白い馬」初発の印象

分.秒	教師の発話	児童の発話
	T60：いいなと思ったところ、心に残ったところに線を引ながら話を聞こうと言ったんだけど、どこかに線を引けた人はいましたか。 松井君。	(挙手あり) C：① <u>白馬はひどいきずを</u> 受けながら、 <u>走って、走って、走り続けて、大好きなスーホのところへ帰ってきた</u> のです。
	T61：ああ、そこに線が引けた。今わかった？松井君が言ってくれたのは、80ページの後ろから4行目、「 <u>白馬は、ひどいきず</u>	

<p>を受けながら、走って、走って、走り続けて、大好きなスーホのところに帰ってきたのです。」のところに線が引けたんだって。<u>なるほど</u>、他にはどんなところに線が引けましたか。おっ、たくさん手が挙りましたね。はい、祐太郎君。</p> <p>T62：同じ人？あ、いっぱいいるね。なるほどね。よく働きました。70ページの1，2，3，4行目「<u>毎朝早く起きると、スーホはおばあさんを助けて、ご飯の支度をします</u>」ってところだよ。そこに線が引けた。まだ、ほかにもありますか。亮一君。</p>	<p>C：「<u>大人にまけないくらいよく働きました。毎朝早く起きると、スーホはおばあさんを助けて、ご飯の支度をします</u>」っていうところですよ。</p>
<p>T81：ああ、なるほどね。そうだよ。スーホって大人ではないよね。そんな、先生くらい大人ではないよね。なのに、そうだよ。少年だよ。少年、まあ、みんなよりはちょっと年上かなって思うけど、<u>それなのに大人に負けないくらい働いたって言う、すごいなあって思ったって言う。なるほど。</u></p> <p>T82（板書しながら）<u>大人には負けないくらい働いたのはすごいな。他はどうでしょうか。</u></p> <p>-----</p> <p>T87：後ろから5行目くらい。「それでも白馬は走り続けました」というところですよ。うん、そこでいいんだよね。79ページだよ。そうだよ。矢が次々に背中にぶすぶす刺さっているのに、<u>白馬は走り続けたんだよね。そこだよ。</u>（板書しながら）白馬は走り続けた。とてもいいところだよ。スーホへの気持ちが伝わってきた。<u>なるほど、そうだよ。すごい。</u></p>	<p>C：まだ小学生くらいなのに、大人に負けないくらい働いているので、わっ、すごいことだと思います。</p> <p>C：白馬は走り続けたところが、早くスーホのところに帰りたいという気持ちが伝わってきて、素晴らしいと思います。</p>

ここでは、評価する言葉や他児童の発言との関係を示そうとする言葉は加えられていない。もし、教師に意図があるとすれば、発表するという行動へのウォーミングアップであろうか。

これに対して、「線を引いたところの感想も加えて発表する」ことを求めた後のT81では、児童の発言に対してまず、「ああ、なるほどね。そうだよ」と賛意を示し、さらに波線の下線を引いたように、本来、「すごい」と発言した児童が理由として述べるべき内容を、教師が語り始めている。

同様にT87でも児童の発言を復唱し、児童が発言しなかった「矢がぶすぶす刺さっているのに、白馬は走り続けたんだよね」と教師が理解した状況を付け加えた上で、「なるほど、そうだよ。すごい」と評価を加えている。

この授業場面を、児童が線を引いた叙述について交流するという視点で見てみよう。児童の発言を契機に児童が線を引いた叙述を教師が受け取り、教師が考えた説明を加え、評価するという一連の流れとなっている。そして、その活動は、延々と授業の最後まで続いたのである。このことから、学級の中で最も権威者である教師が説明し評価を下すことで、他の児童はその叙述をめぐって自分の意見を述べる機会を失っているといえよう。また、教師は、授業としては発表し交流するという授業設計をしながら、実は教師が説明

して理解させる授業がしたかったとも推察することができよう。

3. 4 初任者の行うリヴォイシングから見えてくるもの

- ① 児童の発言をそのまま復唱する、確認のリヴォイシングが多い。単位時間当たりの児童の発話数と、教師の発話数とが拮抗している。これは、教師が児童の発話のほぼ全てにリヴォイシングをしていることを示している。つまり、授業が一問一答型になっており、児童同士が互いの発言や考えに対して意見などを言い合う話し合いにはなっていない。強いて言うなら、「発表」の授業であろう。

- ② 児童の発言をその意図までとらえて正確に復唱することは、初任者には難しい。例えば国語科では、児童の発言を正確に聞き取るには、教材の解釈に沿った鋭い言語感覚が必要になる。
- ③ 単に復唱するだけでは、リヴォイスイングの機能は発揮されない。根拠や理由を尋ね、多様な考えが出されてはじめて話し合いが活発になる。リヴォイスイングを機能させようとする教師の意図が重要であろう。

4 教職経験によるリヴォイスイングの変容

ここでは、教職経験6年目のA教諭の授業記録をもとに、リヴォイスイングの変容について記述することにする。A教諭については、教職2年目（平成22年度）から4年目（平成24年度）の末まで3年間、算数、道徳、体育などの教科で年に2～4回の授業映像を撮りつづけてきている。授業教科の選定はA先生自身が行うため、一定しない。今回分析の対象とするのは、第6学年社会1実践（平成23年度）及び第5学年社会3実践（平成24年度）である。これは、この期間にA教諭が社会科の力量を高めたいと集中的に取り組んだからである。

分析対象は、授業の中で行われる資料提示及び主発問とその前後である。主発問では、教材となる社会的事象、歴史的事象についてその意味づけが問われる。一つの事象でも児童のもつ多様な観点からの意味づけが可能であり、話し合い活動が組織しやすい。また、社会科では理科や算数科に比べて専門的な用語の使用頻度が低いと言われており、平易な言葉で話し合われ分析が容易になると考えたからである。以下、授業記録をもとに考察を加えることとする。

4. 1 第6学年社会科「武士の登場」にみるリヴォイスイング

表4 「武士の登場」から（平成23年6月実施）

分.秒	教師の発話	児童の発話
4.44	T20: じゃあまず、この絵を見てください。 T21: これはある貴族、平安時代の終わり頃に、貴族の館で起こったある事件を描いたものです。	C: 火事 C: あ、平家物語だ。
5.20	T25: これを見てみて、じゃあちょっと何か気付いたこととか、こういうことしているなあっていうの、ちょっと1分間くらい、探してみて。 T30: <u>隠れている</u> 。どこに? T31: これ? あー、ほんとだ、これ見て、 <u>隠れている人がいる</u> 。よく見つけたね。 T32: でも <u>隠れてる</u> 。 T33: これはいいよ。 T34: <u>隠れている人がいる</u> （板書しながら）。よく見つけましたね。 T35: ほかにある人? はい山下君。 T36: あっ、 <u>せめこんでるみたい</u> 。 T37: <u>せめこんでいる</u> （板書しながら）。 T38: <u>せめこんでいる</u> 。これ、 <u>せめこんでいるって、どこからそう思ったの?</u>	C: えー。わかりにくい。 ①何か隠れている。 C: あー、そこ袴みたいなのがいるじゃん。 C: そこかよ。 C: 微妙だ、隠れてた C: 先生、それ書くの? C: えっとね、何だろ、どこかに② <u>せめこんでいる</u> 。 C: よく見ると、下になんか板みたいなのが。 C: なんか、こうやって。 C: 弓じゃないの、弓。
6.12	T39: じゃあ、 <u>せめこんでいるって</u> 山下君が言ってくれたけど、 <u>こういうところからせめこんでいるんじゃないか</u> 。	

この実践では、まず、平安末期の乱を描いた絵図を示し、それを元に権力を失っていく貴族と、権力を得ていく武士たちとを対比的に学ぶことをねらいとした。表4では授業が始まって間もなく絵図が提示され、T25の「これを見て、何か気付いたこととか、こういうことしているなあっていうの、ちょっと1分間くらい探してみて。」という指示が出されていく。児童の一人がすぐに絵図の中から隠れている人を見つけ①「何か隠れている」と言うのであるが、教師は、T30で「どこに」と尋ね、T31では「ほんとだ」と言っている。

教師は絵図を詳細に見ていなかったか、あるいは隠れている人に重きを置かないで見ていたかという反応である。「隠れて（い）る」は、4回復唱されるが、児童全員が確認するわけでもなく、また、隠れていることを意味づけするでもなく、T34では「よく見つけましたね」と賞賛されただけである。

同様に②「攻め込んでいる」

T40：はい花田君。	C：えっと、馬に乗って、 <u>弓で鎧をつけている。</u>
T41： <u>弓で、鎧をつけている。どの人が？</u>	C： <u>馬に乗っている。</u>
T42： <u>馬に乗っている。これ？</u>	C：いろいろな
T43：これとか？	
T44：このへんもそうか、このへんも	
T45： <u>馬(板書しながら)、馬に乗って、弓？</u> あと鎧。	C：はいはいはいはい。
T46：はい、平田君。	C：はい。
T47：あ、 <u>火事</u> 、これ？ <u>火事になっている。</u>	C：えーなんか、 <u>火事にな</u> <u>ってる。</u>
T48： <u>火事が起きている(板書しながら)。</u>	
T49：「これ？」	
T50：これ <u>火事</u> かな、見にくいからな、これ 白黒だから見にくいかな。はい。	C：え、あれ木じゃないの？

は6回復唱され、T36では併せて「どこからそう思ったか」と問うているが、次のT39では、「こういうところからせめこんでいるんじゃないか」と角度の違う発問が出され、児童もきちんとした理由を述べていない。

通常社会科では歴史的事象を提示したら、そのようになった理由を考えさせるのであるが、教師も児童も事実を羅列するだけで意味づけがなされていない。

「馬に乗っている」「火事」「火事になっている」も復唱されるだけで、事実すら確認でき

ない状況で、もちろん賞賛などもないように感じられる。ここでの復唱は初任者と同様、確認のリヴォイシングが行われ、一人一人の多様な意味付けを引き出す機能はあまり発揮されていないと判断されるであろう。

4. 2 第5学年社会科「米づくりのさかなな庄内平野」にみるリヴォイシング

表5 「米づくりのさかなな庄内平野」から（平成24年6月実施）

分.秒	教師の発話	児童の発話
8.30	T58：じゃあこれで気づいたことと、感じたことある人いますか？	C：えっと、①日本海に面してるところに、なんか、日本海に面してる所からきてるものが多い。
	T60： <u>日本海。</u>	C：②日本海に面してるところが多い。
	T61： <u>日本海側のところのお米を食べる人が多い。</u> どんなかんじですか？	C：そうそうそう。
	T62：うん。太平洋、逆に太平洋側どう？	C： <u>ほとんどない。</u>
	T63： <u>ほとんどない。ほとんどないね。</u> みごとだね。	C：少なっ。
	T64：日本海が、日本海側	
	T65：日本海側が多い。	

	T71：なるほどね。日本海側は日本海側でもこっち側のほうは行かなくて <u>北陸とか中部が多い。</u> どうこれ？	C：えっと、はい。ヒカル君に②に付け足して、東北地方と新潟、えっと違う。 <u>北陸地方の日本海側が多い。</u>
	T72：あってる。あってるってかそう感じる？	C：うん。あってる。

この授業では、前半に東京都に移入される米の銘柄と産地を付箋を用いて整理する活動を行い、表5のようにその結果の考察に入っている。ここでは、後半の話し合い部分を検討する。①では、多くの米を移入している先が日本海側に面しているという発言に対し、教師はT60で「日本海」のみを復唱する。②でさらに「日本海に面しているところが多い」と重ねて発言されるとT61では「日本海側のところのお米を食べる人が…」と言い直している。これは、児童の発表と意味が違っている、もちろん話し合いを深める働きもない。T63もT71も移入先の位置の確認であり、T72でその正しさだけを述べている。事実をもとにしての話し合いに向けてのリヴォイシングにはなっていない。初任者の「ちいちゃんのかげおくり」と同様、復唱が不正確な傾向が見える。

4. 3 第5学年社会科「さかな不思議発見」「私たちの生活と環境」にみるリヴォイシング

ところがわずか3ヶ月後の授業ではリヴォイシングの状況は一変する。表6をもとに考察を加えることにする。この授業では、教師の意図が明確に出るリヴォイシングになっている。

まず、教材とした北海道産かきの値段に興味を持たせるためT18で1回だけ「2千円くらい？」と復唱し、その後

表6 「さかな不思議発見」の実践から（平成24年9月実施）

分.秒	教師の発話	児童の発話
3.12	<p>T16：先生実際に、これお店でいくらくらいになっているのか東京で見ました。 T17：北海道産、いくらくらいだと思います？</p> <p>T18：<u>2千円くらい？</u></p> <p>T19：<u>じゃあ、みんな400円より高い予想だな。</u> T20：スーパーで実際にいくらだったか。 T21：平均で大体ね、これくらいでした。 (東京のスーパーの値段「2500円」と板書)</p> <p>T22：どうこれ、高いと思う人。 T23：今日みんなに考えて欲しいのは、同じカニだよ、漁師さんが捕ったカニ、スーパーのカニ、<u>何でこんなに値段違う？</u> (課題漁師の売り値とスーパーの売り値、なぜこんなに違うのだろうかを板書) T24：売り値が違うのは何か理由があるのかな？</p> <p>T27：漁師が安くしている。 T28：<u>どういこと？それは。</u></p> <p>T29：あつ、漁師さんが売れば良い。 T30：漁師さんが安くしている、なるほど。</p> <p>T31：漁師さんが安くしているの？わざわざ。他に、A君。</p> <p>T33：<u>⑥北海道の方がたくさん捕れて、東京では貴重ってことか。</u></p>	<p>C：①2千円。</p> <p>C：3千2百円くらい。 C：1千5百円くらい。 C：1万円。</p> <p>C：うわあ。 C：<u>高い。</u></p> <p>C：え、④漁師が安くしているから？ C：うーん。</p> <p>C：安い値段で、うん。 C：<u>④漁師さんが売れば良い買ってもらえればって。</u> C：えっと、<u>⑥北海道の方が多く捕れる。その一部を東京に持ってきているから高いと思う。</u></p>

多くの児童の発言にはかかわっていない。そして、たくさんの値段の予想をT19「400円より高い予想」と言い換え、生産地の値段より高くなることを印象づけようとしている。その上でスーパーの値段を知らせ、その値段の違いを「なんでこんなに値段違う？」と児童をその理由を検討する話し合いに誘っている。

その結果、水揚げのところで④漁師さんが売れば良いから安くしている。東京のスーパーについては、児童は⑧「その一部を」と発言したのに教師は、T33で「東京では貴重」と分布的な観点を入れたまとめを児童に返している。

このように教師が意図的にまとめたり別の言葉で表現するリヴォイシングは、表7に示す平成25年2月の実践でさらに顕著になる。

この授業では、冒頭に松の小さな塊を出して児童の興味を引くとともに、木材の値段について予想させている。しかし、児童が様々に予想するC27～C32の発言には、教師は全くリヴォイシングをしていない。逆に、T22以降ではC37「値段？」と単語での児童の答えに教師はT24「木材1本あたりの値段の変化」とグラフ名を正確にリヴォイシングしているし、出典についても、C48、C49などの「りんや」「はやしの」に対してもT28で「りんや庁」と正確な読みをリヴォイシングしている。これらのことから、教師には、正確にグラフを読むトレーニングを行い、素早くグラフを読む児童だけでなく全ての児童に学習に参加させたいと考え、その意図に合う発言だけにリヴォイシングしたとみることができる。

グラフの読み方を指導した後

表7 「私たちの生活と環境」の実践から（平成25年2月実施）

分.秒	教師の発話	児童の発話
2.25	<p>T20：もうちょい高いと思う。</p> <p>T21：5万円くらい。じゃあちょっと、これ見てみてよ、これ。</p> <p>T22：<u>これ何のグラフ？</u> T23：<u>ヒカルくん、これ何のグラフですか？</u></p>	<p>C26：5万円くらい。</p> <p>C27：<u>2千万</u> C28：<u>40万くらい。</u> C29：<u>木、最近、値上がりしてんじゃん。</u> C30：<u>※※※万くらいするだろう。</u> C31：<u>100万くらい。</u> C32：<u>何千万円。</u></p> <p>-----</p> <p>C37：<u>値段？</u></p>

<p>T24：<u>木材1本あたりの値段の変化。</u> T26：<u>縦は何表してんの？</u></p>	<p>C43：円 C44：2000円，えっ？ C45：面積。 C46：値段。</p>
<p>T27：<u>これはどこが作ったデータなの？どこから資料集めたの？</u></p>	<p>C48：<u>りんや</u> C49：<u>はやしの？</u> C50：<u>はやしのちょう。</u></p>
<p>T28：<u>これ読めない？りんや庁っていうの。</u></p>	<p>C52：林野庁？</p>
<p>T29：こういう，森林のことについて，お仕事しているところ。どうですか？これ見て，気づいたこと，感じたことある人？</p>	<p>C53：木がめちゃくちゃ安くなってる。</p>
<p>T31：木がめちゃくちゃ安くなってる。檜はだいたい，いくらくらい？</p>	<p>C54：2000～3000円くらい。 C55：2000～</p>
<p>T32：2000円くらいだな。昔はどうだった？</p>	<p>C56：すげー高い。12000。</p>
<p>T33：おお～，11000くらい。</p>	<p>C57：1番高い時で。</p>
<p>T34：下がっていった。1本2000円です。</p>	<p>C68：まったく違うよ。</p>
<p>T41：<u>じゃあさ，なんでこんなに，下がって来ちゃったの？</u></p>	<p>C68：まったく違うよ。</p>
<p>T44：今，こんな。2000円。</p>	<p>C72：確かに。</p>
<p>T45：リュウタくんどうぞ。</p>	<p>C75：はい。みんないっぱい作ってる。 C77：<u>同じようなのを，いっぱい作るから，その1本の値段がどんどん下がってくる。</u></p>
<p>T46：じゃあ，木がたくさん余ってるってこと？</p>	<p>C79：どうだろう？</p>
<p>T47：木が余ってる。</p>	<p>C86：はい。みんなが木を，<u>檜とか杉の木を買わないから，木が余って，もっと売れるように安く。</u></p>
<p>T48：なんで木が余ってるの？</p>	<p>C91：でも家とか結構建てるじゃん。</p>
<p>T50：あんまり買わないっていうのは，あんまり？売れないってこと？使わないってこと？</p>	<p>C92：けどだいたいコンクリート。</p>

は，木材の値段に関する発言にさかんにリヴォISINGし，木材の値段が下降している事実をつかませている。そして，主発問であるT41「なんで，こんなに（値段が）下がってきたの？」につなぐことに成功している。主発問以降，児童からは「同じようなのをいっぱい作るから」「木が余っている」や最近の住宅の原材料にまで話題が広がっていった。

5 まとめ

教職経験を重ねてきているA教諭のリヴォISINGは，教職経験の経過とともに減少しているが，児童の発言は飛躍的に増加している。このことから話し合いを有効にするには，リヴォISINGの数を減らし質を高めることの必要性が示唆される。

また，当該教科は社会科であるので，表6，表7の実践ではリヴォISINGは，意味付けをめぐって話し合うための事実確認と，事実の意味づける時の各児童固有の発言に向けられている。このようなリヴォISINGができるのは授業意図が明確だからであろう。いわゆる指導内容の理解（これを一般に「教材研究」と学校現場では呼んでいるが）の充実が，リヴォISINGを効果的にすると言えるのではないだろうか。

さて，A教諭の実践を見ると，ごく短期間でリヴォISINGが変容している。そのため，変容の原因が特定しやすい。表5示した実践の後，A教諭は休

みの日に山形県庄内平野を訪れて，水田や転作地の映像，農家の人の聞き取りを試みている。そして，その取材から転作をテーマにした実践を試み，自分の授業構想が実現できるという手応えを感じている。A教諭の聞き取りからは，「これまでも，一度行ったことのあるところを教材にすると，子どもの反応が違っていたから」という発言が聞かれており，その先行経験が現地の調査へと駆り立てたと言えよう。

以上述べてきたように，初任者は単純な復唱によるリヴォISINGが多いのに対し，若手教員は授業経験を重ねるごとにリヴォISINGを意図的に使用できるようになること，何を教えるかという指導内容の理解が，リヴォイシン

グの使用に影響していることが示唆されると言える。小論では、あまりに実践事例が少なく客観性の確保に課題がある。今後さらに多くの実践例を収集して、リヴォイシングから教師の授業力がとらえられる方途を確立していきたい。

引用・参考文献

引用文献

- 1) 的場正美は、重松鷹泰ら名古屋大学グループの授業分析を日本独自の授業研究に源流を發するものとして位置づけている。的場正美, 柴田好章編『授業研究と授業の創造』p7 溪水社 2013
- 2) 秋田喜代美ら(1991) 「教師の授業に関する実践的知識の成長」- 熟達教師と初任教師の比較検討- 日本発達心理学会 『発達心理学研究』第2巻 第2号 pp88-98 1991

参考文献

- 一柳(2012) 『授業における児童の聴くという行為に関する研究-バフチンの対話論に基づく検討-』風間書房 2012

How Do Young Teacher's Revoicings Change Through Their Teaching Experience?

Ken SETO* · Makoto KONDO**

ABSTRACT

Now, in Japan it is said teachers over the age of 40 is accounted for 70% of the entire faculty. So big generational shift that mass adoption and retirement of teachers is in progress. It is that faculty of leadership experienced left the teaching profession in large quantities, on behalf of them, faculty organization that is borne by young teachers, including a starting salary person. From the point of view of education force, maintenance and development of the school, teaching force improvement of young teachers has become a major issue of school and Board of Education.

Therefore, in this study, we aimed to investigate about skilled process of young teachers and which enhances the teaching force. At that time, we noted that a response activities (below, we say revoicing) that teachers do in the classroom.

Ichiyanagi (2009) describes the potential that revoicings of teachers in the classroom support the activities of the children listen by focusing on the activities that the children listen. He carried out a survey of the recall task immediately after the class and children had written and stored a lot, especially about that the teacher has done revoicing. Assuming that is, the children are learning as a landmark teacher's revoicing, it is expected that the quantity and quality can significantly affect the children's learning and the quality of education.

So we analyzed the lesson of several people's starting salary for revoicing. And we decided to follow continuously the transformation of a young teacher's revoicing by classroom observation at several times for over two years.

As a result, it is suggested that (1)the starting salary person do many revoicing by simple repetition, (2)young teacher will be able to use intentionally revoicing by every superimposing the class experience, (3)young teacher's understanding of teaching content to what teach affect the use of revoicing.